令和７年度第１回　静岡市茶どころ日本一委員会　会議録

１　日時　　令和７年９月８日（月）11 時 00 分から 12 時 00 分

２　会場　　静岡市役所清水庁舎３階　第１会議室

３　出席者　【委員】　岩崎邦彦委員、一家崇志委員、三津山定委員、宮原友光委員、
石切山誠委員、片平次郎委員、中田吉彦委員、永松康宏委員、
岩崎正樹委員、池谷誠委員　　（委員全 10 名出席）
【事務局】稲葉経済局長、太田農政部長
（静岡市）農業政策課　水野お茶のまち推進担当課長
お茶のまち推進係　髙橋係長、増田主査、奥平主任主事、
檜枝主任主事、尾下主任主事、松下主事

４　傍聴者　　なし

５　会議内容

（１）開会

（２）委員委嘱

（３）議事

議題（１）第２次静岡市茶どころ日本一計画の進捗について

議題（２）今後の茶業振興に向けた施策について

発言者	内　容
事務局（尾下）	資料１について説明
事務局（髙橋）	資料２～４について説明
三津山委員	目標の指標と現状がかけ離れてきており、状況の変化に合わせた目標の見直しは必要。資料のとおり、高品質なお茶を小ロット生産する生産者や、主に高品質な茶や碾茶等を扱う茶業者は経営が良好である一方、大ロット生産者や共同工場の経営が非常に大変になってきている。意識的に変化があるのはやはり碾茶ブームだが、碾茶ブームに対する考え方はバラバラ。乗り遅れてはいけないという考え方の人もいれば、いつまで続くかわからないこと、鹿児島が先行していることからブームに乗ることを不安視する人もいる。そこをどう整理するかが非常に難しい。
岩崎邦彦委員長	抹茶がブームか否かというところで、海外の展開はどうか。
永松委員	現在、海外から求められるのはやはり抹茶。アメリカ、中国、東南ア

	ジアを中心に引き合いが強い。このブームがいつまで続くのか、本当に転換していいのかは検討が必要だが、今の需要が非常に多いのは事実なので、そこの判断は難しい。海外からの需要が少ない煎茶をどうプロモーションしていくかが今後の課題となると思う。
中田委員	日本茶インストラクターの静岡支部では、小学校でお茶の美味しい入れ方教室を実施しており、今年度は市内 73 校、約 4,700 名が参加する。これだけの規模は日本一だろうと思う。小学生を対象にしたお茶博士については、昨年募集 80 名のところ 160 名の応募があった。こういう活動を続けていくことが必要。
岩崎邦彦委員長	学びのニーズはあるということ。静岡県立大学でも茶学入門は一番人気の講座。若い人にもこういった学びのニーズはある。
岩崎正樹委員	リーフのお茶を飲んでもらうための取組をしている。しずチカで「一茶」を経営しており、売り上げは非常に伸びている。そこではお茶の説明をし、お茶の良さを知ってもらうことが購入につながっている。 鹿児島は完全に抹茶に舵を切っており、宇治も玉露を残して、ほとんど煎茶はないような状況。今年の 2 番茶、3 番茶、秋冬番茶は高値が続くことが予想されており、今後ますます煎茶が不足していく中で、静岡市は煎茶に力を入れて特化していく方がよいのではないか。これだけブームなので抹茶も必要ではあるが、つくるのならちゃんとした碾茶をつくってもらいたい。中国もものすごい抹茶ブームでどんどん茶葉も増えている。現在は国内ですべて消費されているが、今後抹茶が余るようになったとき、日本の抹茶が負けないようにするためにも、ちゃんとした抹茶をつくる必要がある。
岩崎邦彦委員長	駅の一茶はとてもにぎわっている。単に売るだけではなく、情報を提供する等コミュニケーションをしている。 専門性として情報を伝えることの重要性が見て取れる。
池谷委員	国内、海外の消費者をターゲットに、観光目的地として静岡に来てもらうために、お茶のブランディングに取り組んでいる。ティーツーリズムの取組等、相乗効果でお茶のブランディングができるとよい。
一家委員	碾茶のブームに乗るべきではない。碾茶の栽培は環境への負荷が大き

	すぎるため、世界的に認められない時代がここ数年以内にやってくると思われる。どこかの県と争うというより、静岡市の茶業がどこに位置するか考えて政策をとらないといけない。やはり静岡は煎茶の市ではないかと思う。目先の部分ではなく、品種の育成、栽培体系も含めて、どういうお茶をつくっていくかにフォーカスすべき。茶園の減少についても考えなければならない。日本一を謳う以上、景観の維持は重要。また、本気で農業収入 500 万円を目指すならマーケティングの専門家を含め、栽培している人の意見を取り入れる必要がある。
宮原委員	生産者としては、この先、生産量を増やすというのは非常にむずかしい。年齢的なこともあり、お茶の価格が落ちたことを理由に離農していく人は多い。とにかく価格に安定感がない。また量が多ければそれだけ収入が増えるかといえばそうでもなく、たくさん採れるほど価格が落ちるという現象が起きてしまう。
石切山委員	国内消費を増やすこともちろん重要だが、海外のニーズに目を向けることも大切。今、清水には多くのクルーズ船が来ており、下船後街歩きをする人が増えてきている。そういう人たちに静岡市内でお茶を飲んでもらったり、ティーツーリズム等に参加してもらう工夫ができるのではないか。
片平委員	去年から掛川の碾茶工場に茶葉を持ち込み、抹茶をつくっている。価格は１キロ 4 万円で、今年は売り始めて 1 か月で 75 キロすべて売れた。海外からの抹茶を求める声は非常に多い。碾茶生産については、経費も少なく、一反で 200 万円くらいの収入になる。やろうと思えば碾茶はできるので、何億もかけて静岡市が補助しなくてもよいのではないか。生葉生産者が儲かるというのはイメージしにくいのが現状。ただ、ここが沈むと静岡市の茶畑はどんどんなくなっていく。静岡市のお茶が、有機の碾茶に転換していくというのはイメージしにくく、やはり煎茶をつくり続けた方がいいのではないかと思う。

（５）閉会